

50. 龍吐水と火の用心

小型の消防ポンプ車の普及以前は、龍吐水（りゅうどすい）は村の消防活動の主力兵器だった。江戸時代後期にオランダから伝来し、ただちに国産化されたものである。

◆龍吐水

〈A〉は龍吐水。箱部は長さ 85cm、高さ 45cm、竿棒は 242cm で、K 家より寄贈のもの。

〈B〉は一津屋の元村長家の主屋の入口の上に掛けられた「一津屋邨（村）」の龍吐水で村持ちだけに大型。鳥飼上のゴグラ（郷蔵）にも村の消防の龍吐水があったという。

◆オランダから伝来

龍吐水について記した文献としては、薩摩藩の編集した百科事典『成形図説』（1803）が古い。「恒升車は俗に言う龍吐水なり。しかるに此の製は革あるいは布にて囊（ふくら）をこしらえ筒のようにして幾十間にも継たて、其の下的一端を井泉の底に浸て、左右よりたたらを踏むごととして水を吸昇せ、其の上の一端をば、おもう所へ振りつけそそぎかくるなり」。ここではポンプもさることながら「其の囊には桐油をひしと塗り堅めて水を洩らさず。もとより囊なれば屈伸自由にしなえつたえる」と継ぎ足し自在の長い防水袋に感心している。ホースのことなのだが、言われてみればたしかに画期的な技術だったのだ。

◆ただちに国産化

〈C〉は『農具便利論』（1822）のブランドスポイト。スポイト（龍吐水）は天明（1781～89）の頃オランダ人が持ってきたのを浪速の人が買い求め、銅山の水抜きや非常用のため時計屋親子にいくつも複製させたとして、寸法入りの分解図を掲げている。

真鍮のシリンダーやネジ結合のあるポンプを即座に複製した技術水準は相当なものだ。

〈D〉は同じくスポイトでの消防風景。江戸時代後期にここまで実用化していた。

◆農業にまで利用？

『農具便利論』はまた、田畑の灌漑にも使われたと、龍吐水を要所に連結して山越えで田畑に灌漑する様子を図入りで説明している。龍吐水の灌漑利用は他にはあまり聞いたことがないが、新技術を受け入れた人々があれこれ応用をさぐる積極性がうかがえる。

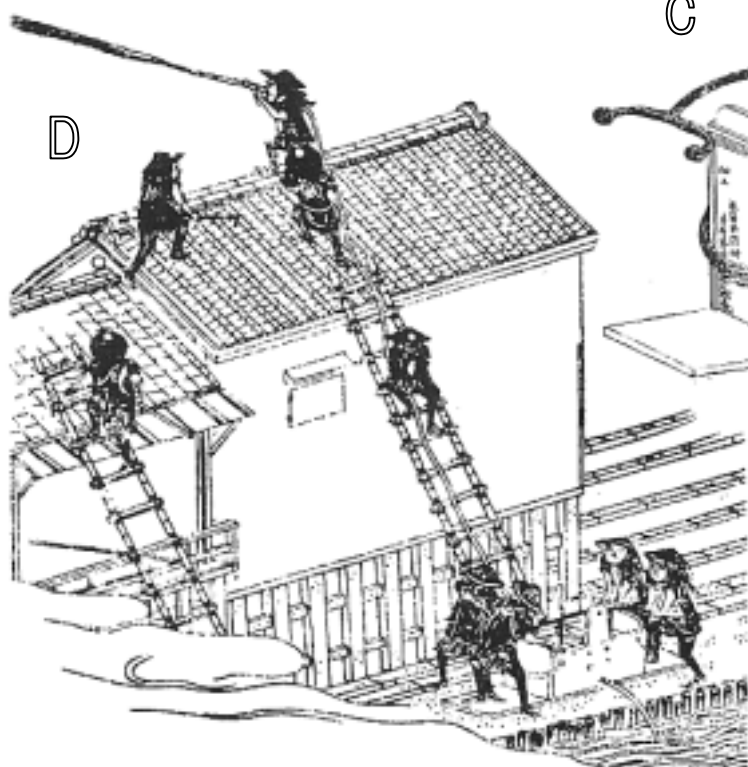
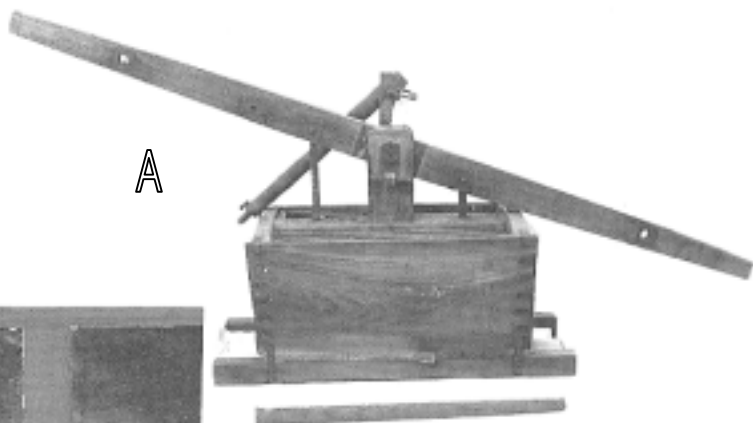
◆なぜ火の用心

村のルール違反者への制裁として村八分が知られているが、村の 10 の付き合い項目のうち火事と葬式の 2 つは除外して、残る 8 つは付き合いを止めたことから村八分という、とする語源説がある。村八分中でも火事だとなれば協力し合うところに防火への関心の高さが現れている。銀行のなかった時代、全財産を奪う火事ほど怖いものはなかったのだ。

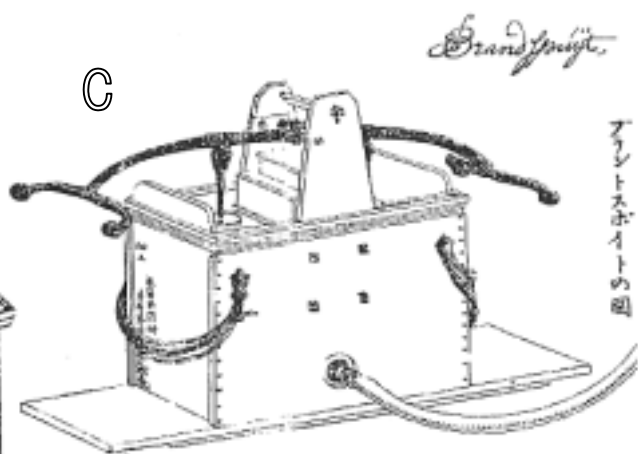
B



A



C



Grandpierre

フレンチスボイトの図